

---

# DORAGONOID《ドラゴノイド》

blurd

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴノイド  
DORAGONOID

### 【NZコード】

N3867V

### 【作者名】

b1urd

### 【あらすじ】

天涯孤独の少年シリアは、平凡ながら楽しい生活をおくつていた。

しかし、突如現れた謎の男ジルにより、自分は人間ではないと告げられ……

## 光と闇は相交わり安息の時は幕を引く

「起立！ 礼！」

「ありがとうございました！」

クラス全員の声が重なり、今日の授業はすべて終了した。生徒達は後ろにあるロッカーめがけて歩き出す。しかし、後列にいる一人の少年はロッカーを見向きもせず、大きく伸びをしていた。

「あ……終わった……」

シリア、十三歳。

今日は待ちに待つことが一度もない、期末テストの日だった。シリアはいくつもの箇所に飛び出た、文字通り無造作ヘアの髪型を、時たま　といふか五分に一回の割合でかきながら受けていたため、純血の色に染まった髪型は、さらにぼさぼさになっている。

いや、純血の色というのは、本物の血が染まったのではなく、単に生まれつきそういう髪の色というだけだ。

しかし、ぼさぼさになつた髪の犠牲も空しく、テストの結果は最悪だった。

分かつてはいたが、やはりむかむかする。こいつときは寝るのが一番！　と何時か読んだ本に書いてあった……気がする。そのへんの記憶はあいまいだが、とりあえず寝てしまえ！　半ばやけくそになつたシリアは背中を丸め、ふて寝し始めた。

「おい、シリア！　なに泣いてんだ！？」

背中にバツシーンと衝撃がはしる。「いつてえ！」と叫び上体を起こすと、そこには見慣れた顔があった。

「なにすんだ！　レン！」

シリアが背中をおさえながら講義する。

「お前が呼んでも起きねえからしかたなく叩いてやつたんじやねえか。少しは感謝しろ！」

レンと呼ばれた少年の髪は、シリアとは対照的でくせ毛一本も無い、いわゆるストレートパーマと言つやつだ。目つきは鋭く、初めて会った人なら思わずたじろいでしまうだろう。だが、性格は律義で人情が厚い。皆に好かれるタイプである。少々乱暴だが。

「叩き起こすのも限度があるだろ！ 少しは考えろ」

「あーあー分かったよ、今度から考えるから」

しかめつ面で息巻くシリアに、レンはめんどくさいついで両手で怒り和らげる。

この二人、こう見えても親友で同じ孤児院に住んでいる。シリアが孤児院に住み、最初に出来た友達なので信頼も高い。

背中の痛みがようやくおさまったシリアは、あらためて周りを見渡すと、教室の中はシリアとレン以外だれもいなかつた。

「あれ？ もう帰りのホームルーム終わつたのか？」

「とっくに終わってるよ。帰りの用意はしどいたから早く帰ろうぜ」

そう言つてレンはシリアのエナメルバックを差し出す。「いこうぜ」と小声で言つと、レンは教室を後にした。

シリアはレンの背中を見て、唖然とした表情を浮かべた。

「レンの奴……俺がおきるまでまつてたのか……」

もちろん口には出さなかつた。

「ただいまー」

孤児院の玄関をあけると、初老の女性が真っ先に「おかえり」と言つてくれた。この孤児院の寮長だ。

パツと見だと三十から四十代に思えるが、実際は五十代前後の女性だ。寮長は、この孤児院の責任者で、だれでも優しく穏やかに接している。生徒達は、この寮長を愛情をこめて、「お母さん」とよんでいた。

「で、どうだったの？ 期末テスト」

ギクッ！

二人同時に硬直。この様子だと、レンもシリアと同じ結果らしい。

緊迫な表情の一人に、寮長はいたずらっぽい表情を浮かべると、「あまりよくなかったんでしょ、二人とも。分かつてるわよ、そんなこと。今度頑張りなさいね」

寮長の言葉に、二人はホッと胸をなでおろした。それからシリアはとレンは、自分の個室に戻るために分かれた。

この孤児院の生徒数は五十八人。その生徒一人一人に個室が設けてあり、おもに寝室の役割をしている。

シリアは、いつも通り個室に戻ろうと、玄関を左折し、ホテルのようににいくつものドアが左右に設置してある第一廊下に歩み寄る。ポケットの中から鍵を取り出し、一〇七と彫られたドアの前に立つと、ドアノブの中央に鍵を押しこんだ。ガチャリと音がしたのを確認すると、鍵を引き、ドアを開けた。

「え？」

目の前に映った自分の部屋を、異常と思うのに数秒もかからなかつた。部屋の中は、机やベットなどが置いてあり、いつもとなんら変わりは無い。しかし、それを通常と呼ぶには無理難題なことだ。そこには見知らぬ男が立っていた。背を向けているため素顔は分からぬ。しかし、これだけは確実に言える。

こいつは危険だ。

男はゆっくりと振り返る。シリアは反射的に身構えた。こいつが危険なのは本能的に理解できる。部屋の鍵は自分が持っているはず。にもかかわらず部屋に侵入しているのは強盗の類だろう。シリアはそう考えていた。

しかし、男の口から出た言葉は強盗が口にするものからは縁遠いものだった。

「初めてまして、霸龍シリア…… お向かいに上がりました」

偽りが今全てなり今までの出来事はなんだつたのだらうか（前編）

今回から文字数がぐんと減ります。

偽りが今のが今なら今までの出来事はなんだつたのだらうか

「だ、だれだよ……あんた……」

ようやく振り絞りだした言葉がそれだつた。声は震えてる。あたりまえだ。いきなり現れた男に「お向かいに上がりました」など言われたら混乱するに違ひない。

男は振り返り、シリアに向かつてふかぶかと礼をした。

「名乗り遅れました。私の名はジルと申します。 シリア・アス

トラール」

突如自分の名を呼ばれたことに、シリアは一瞬目を見開いた。だが、すぐに男 ジルをキツとにらみ、

「あんた誰なんだよ。どうしてオレの名を知つてんだ」

と、凄んでを見せた。だが相手は微動だにしない。それどころか微かに笑つていた。

「名を知つているのは当たり前でしょ。大切な、同胞なのですか

ら

「同胞？ どういうことだ！」

「同胞は同胞。そのままの意味です。……もつとも、記憶を失つているあなたには、なんのことか分からぬでしょ。うが」

記憶を失つている。その言葉に眉がピクリと動いた。そう、シリアには幼少時代の記憶が無い。記憶がからうじて残つているのは、寮長 養母が、この孤児院に連れてきたことまでだつた。

「あなたは、この世に地がつながつた人間がない、天涯孤独の身」

「……知つてるよ。だからなんだつてんだ。今オレには家族がいる。血がつながつていなくても、オレの大切な……家族だ！」

拳を握りしめ、そう叫んだ。自分には血のつながつた人間がいない。そのことをシリアは封印していた。一度でもそう思つてしまえば、養母が、友達が、どこか遠くにいつてしまう気がしたのだ。

「そう思つてゐるのは、あなただけだ」

その言葉を聞いた瞬間、頭の中の何かが弾けた。

「お前に何が分かる！ 母さんは……この孤児院の人たちは、オレを家族だと慕つてくれた。両親は……オレが生まれた直後に死んだ。天涯孤独だったオレの身を、寮長かあさんは引き取つてくれたんだ。オレを……家族といつてくれたんだ！」

一瞬の静寂。その静寂は、ジルの一言より砕けた。

「違う」

「……え？」

「今の話だと……あなたには家族がいたということになります。違いますよ。あなたに家族がいるわけがない」

「どういう……ことだよ……」

ジルはシリアは一心に見ると、ゆっくりとその口を開いた。

「あなたは人間ではない。生まれは天により君臨する帝雲、『龍仙ドラケル・ク』

地ラウドとしてあなたは、そこに住まつ人知を超えた生命体『ドラゴノイ

ド』だ

覚えていたのは母が自分を抱きしめる姿と、自分が泣いている姿

「オレが……人間じゃない……？」

投げかけられた言葉に、シリアは歯を食いしばる。

「どういうことだよ！ オレが人間じゃないって！？ なにを根拠にいつてるんだ！ そもそもドラゴノイドってなんだよ！」

息を巻くシリアに対し、ジルは冷静に答えた。

「ドラゴノイドとは……人間がようやく一本足で立ち始めた頃、すでに存在していた生命体。それは自然の力を体内に取り込み、自らの力として扱うことが許された、天の存在、それがドラゴノイド。そして貴方は、自然の主ドラゴンの力を体内に取り込んだ、霸龍シリア」

「だから、その根拠はなんだってんだ！ オレは……人間だ！」

その言葉をさえぎるように、ジルは言った。

「今から十年ほど前……この世界でドラゴン捕獲計画が立案された。おそらく人間が、貴方の姿を見たからです」

「オレを……？」

「そう、霸龍は自らをドラゴンの姿に変化させる。それが霸龍の力だからです。そして貴方は右翼と背中を負傷し、キヤノン砲でとどめをさした。そのさいに記憶を失った。そしてドラゴンから人間にもどった貴方をあなたの養母が発見した、ということでしょう」  
ジルの言葉に、シリアは何も言い返せなかつた。シリアは背中と右腕に大きな傷後がある。そして赤ちゃんのころの写真も、なにも見せてもらつたことがないのだ。

「オレは……人間じゃない……」

シリアの声は、重く、絶望に満ちていた。

「そう、貴方は人間ではない。やつと分かりましたか。人間界で迷つた同胞を連れて帰る。それが私に課せられた任務です。貴方が人間にドラゴンとばれるのは、我々も心苦しいので」

ジルの言葉がまったく聞こえてないようだ。シリアはただ放心している。

その姿を見て、ジルは一息つくと言った。

「明日の十一時、近くにある公園で待っています。その間に、人間界でやり残したことを済ましてください。では……」

そう言い残し、ジルは一瞬にして消えた。おそらく高速で移動したのだろう。

ジルが消えてからも、シリアは抜けがらのようになっていた。自分が人間ではないということ、なにより、母が嘘をついていたということが、シリアにとてつもなくショックを与えた。

「シリア～ごはんできたわよ～」

その時、シリアの後方で声が聞こえた。おそらく食堂でよんでいるのだろう。声が少しこだましてている。

「わかった……今行くよ……」

シリアは小さくそう答えると、部屋を後にした。

すべてがひり返つたあの時間が、頭に残つて離れない

食堂で夜食を食べている時も、シリアはそのままだった。

母が話しかけても反応せず、友達が話しかけても、まったく反応の色を示さなかつた。

レンその姿を怪訝な表情で見ていたが、話しかけても無視される気がして、この日は一言もしゃべらなかつた。

夜になると、シリアはまっさきに個室に行き、そのままベットに寝転んだ。今日は何も考えたくなかつた。

「シリア」

ドアの方から声が投げかけられた。見なくても分かる。母さんだ。

「……なに？」

シリアはそつけなく答える。今日さもう、だれとも話したくはない。

「今日、何かあつたの？ おかしかつたわよ、今日のシリア。なにか悩みがあるなら行つて御覧なさいよ。母さんが相談にのつてあげるから」

その言葉が癪に障り、シリアはギリッと歯を鳴らした。

「うるさいな！ 何母親ぶつてんだよ！ 知つてんだよ、オレが捨て子だつたことぐらい！ なんで……なんで隠してた！」

寮長は、しばらく呆然とシリアを見ていたが、声を震わして答えた。

「な……なんでそのことを……」

「今はそんなことじうでもいい。なんで隠してたんだ」

「『めんなさい。その事を言えば、シリアが傷つくと思つて……』

「オレは……嘘をつかされていた方が……よっぽどショックだったけどな」

寮長は、ぐつと口を紡ぐ。

「そんな、そんなつもつじやなかつたのよ。……『じめんなさい』  
「『じめんなさい』か。それしか言ひこと無二のかよ。もひ、オレは  
あんたを母親とは認めない。じゃあな」

そう言つて個室を出て行くシリアルの背中に、母親の鳴き声が聞こ  
えた。すすり泣きだつたが、はつきりとシリアルの耳に聞こえてくる。  
それでも構わなかつた。今はもう、何も考えられなかつた。

「おこ」

早歩きで廊下を進むシリアルの背中に声が投げかけられた。レンだ。  
「さつきの話、聞いたぞ」

「だから何?」

レンは大きく皿を見開き、シリアルの胸ぐらをつかんだ。

「何じやねえよー。お前……母さんになつて」と囁つてんだ! 嘘  
をつかされたぐらこで

……

「嘘をつかされたぐらこで? そのことが、どんなだけつらこ事かわ  
かんのかよー」

レンの手を振り払い、シリアルは玄関のドアに手をかけた。  
「勝手にして!」

レンの叫び声が響くなか、シリアルは孤児院を出た。

## おわえきれない憎しみが悲しみへと変わっていく

孤児院から外に出ると、辺りは真っ暗だった。からうじて見える景色は街灯のおかげだろう。

シリアに行く先などなかつたが、とりあえず近くの公園に立ち寄つてみることにした。昔から公園が好きで、いつも行つていた。なぜだか知らないが、公園に行くと、心が安らんだのだ。

公園めがけて、シリアは足を進めた。耳触りな車の音が、シリアの横を何度も走りぬける。その音にまぎれて、子供が泣いている声がした。声がする方に顔を向けると、何人かの人々が、黒い服をきて集まっている。その片隅には、遺影らしきものを両手でもつている子供がいた。

葬式だ。

写真からして、おそらく母親の葬式なのだろう。それを見ていると、言い知れぬ思いがこみ上げ、シリアは足早にそこからを立ち去つた。

公園につき、シリアはベンチに座つた。

なにかが、なにかが頭の中に突つかかつて離れない。それは、あの葬式を見たときからだ。

「……母さん、レン」

一言、そつづぶやいた。いまさらになつて後悔している自分がいる。でも、もう戻れない。あんなことを行つてしまつたのだ。

「どうしてオレは……うつ！」

その時、後頭部に衝撃が走つた。そこを押さえながら振り向くと、高校生ぐらいの男が四人、シリアを見降ろしていた。

「おい、金よこせよ」

その中の一人が言った言葉で、シリアはすぐにこの事態を理解した。

「おい、無視してんじゃ……ねえよ！」

もう一人の男の拳が腹部に入り、シリアはうつり、とうめき声をあげ、その場にうずくまつた。それを見た男達の笑い声が、シリアに降り注ぐ。

「……笑つてんじゃねえよ」

「あ？」

その言葉に男たちは眉をピクリと動かし、シリアの顔に耳を傾けた。「なんだつて？」

「笑つてじやねえつて……言つてんだよ！」

その瞬間に顔を上げ、男の腹部を力の限りに殴つた。

「ぐおっ……」

そう小さく声を漏らした後、男は腹を押さえながらよろよろと歩き、力なく倒れた。

「つてめえ……なにしてんだ！」

もう一人の男が拳を握りしめ、シリアの横顔を殴りつけた。

シリアは半歩のけぞつたが、腕を大きく振りかぶり男の頭めがけて振り下ろす。

「ごあつ！」

頭上を強打され、男はその反動で地面に顔面をぶつけ、動かなくなつた。

シリアは残つたもう一人の男を睨みつけた。その顔は怒りにより、鬼

いや龍のそれに見えた。

「ひつ……ひい！」

なさけない声をはき、男は走り去つて行つた。それに連鎖するよう、意識を取り戻した二人も背をみせ逃げて行く。

「はあ……はあ……はつ……」

小さくやう声をもらじ、シリアの体が地面へと落ちて行つた。

## 世界で一番大切なものの それは

「…………リア…………シリア！」

大きく体を揺さぶられ、シリアはうつすらと目を開けた。そのとき眼前に広がったのは、涙目で自分を見る母の姿と、その横で心配そうに見守るレンの姿だった。どうやらここはシリアの個室の中らしい。そこベットに、シリアは横たわっていた。

「母さん…………レン…………」

薄れた声で、シリアはうつぶやいた。ゆっくりと体を起こしそうとすると、全身が痛みに包まれ、シリアは「うう」とため息を挙げた。

「あなた傷だらけだつたのよ。しかも全身。まだ動かないで」「ほんとだよ。お前を探しに行つたら公園でお前が倒れてるんだからな。マジでびっくりした」

その言葉を聞いて、シリアの目が涙であふれそうになつた。母さんにもレンにも、あんなにひどいことを言つたのに、二人は全く気にしていらない様子だつた。

「…………ごめん」

ただ一言、そうつぶやいた。

「ごめん！ あんな、あんなひどいこと言つて……もう遅いかもしれないけど……許して」

最後の言葉を行つたあと、シリアは耐え切れなくなり涙を流した。それにつられて、寮長も涙を流す。

レンは、涙が流れるのをこらえるように目一度つぶると、シリアの目の前に拳を突き出した。

「ばかやうう。家族は、ケンカしたぐらじゅ見捨てねえんだよ。分かつたか？」

シリアは目をこすりレンに笑顔を見せる、拳と拳を打ちあつた。

「ああ。ちゃんと頭の中に入れとくよ」

寮長はしばらくその光景を見た後、シリアに声をかけた。

「シリア、私はあなたのことを家族じゃないなんて、一つも思つてない。この孤児院にいる全ての人が、私の家族。この孤児院にいる全ての人は、あなたの家族よ、シリア」

「うん、ありがとう母さん。迷つて迷つて、やつとたどり着いたこの場所が、一番好きなんだ。もう迷わない」

「ええ、そうしなさい。あなた方向だから、探すのが大変なのよ」

三人はしばらく笑い合つた。もう、あの夜の空気は消えていた。

「ねえ……母さん」

「なに?」

「家族つて……いいね」

そのあと、シリアは傷をいやるために寝た。心の傷はいやんでも、体の傷はまだ治らない。しかし、心の傷がいえたシリアにも、一つ不安があった。

ジルの存在である。

今の時刻は十一時。シリアに残された時間は少ない。その少ない時間で、どうすればいいのだろうか。

いちかばちか戦つて追い返すか？しかし、自然の力を取り込んだといつうドラゴノイドに勝てるわけがない。自分の霸龍の力というのも、どうやって解放するのか分からぬ。

結局どうすればいいのか分からぬ。不安が絶頂まで達した瞬間、シリアの頭の中に声が響いた。

『だいじょうぶだよ』

「…………え？」

小さくつぶやき、シリアはがばつと布団から飛び起きた。近くに人がいる気配はない。呆気にとられていると、またもや声が響いた。

『不安にならなくても大丈夫さ。使いかたは記憶が教えてくれる』

『使い方……！？』

『誓つたんだよね。もう、迷わないくつて』

頭にでんげきが走る。そうだ、誓ったんだ。もう迷わない。もつ、家族を不安にさせない。

『人間として、生きるために』

シリアは拳を握りしめる。その顔はすがすがしい笑みを浮かべていた。

「ああ。その通りさ。人間として生きるために、戦つてやる……」

ベットの横にある家族の集合写真を見ると、シリアは言った。

「行つてくるよ 母さん、レン、みんな……」

窓を開け、外に出た。ここは一階の医療室。落ちればただではすまないが、そんなことはシリアには関係なかった。

スタンとなんなく地面に着地すると、顔を前に向け走りだした。

『 そうだ、不安にならなくていい。恐れるなくていい。君は最高の力を持っている』

## 静かなる夜に　たつた一人の運命が定まるつとじていた

驚くことなく、公園につくまで五分とかからなかつた。まるで自分の脚力が何倍にもなつたような速さが出ていたようだつた。

辺りの静けさは、今から始まる戦いを見守るようだつた。当然真夜中に人がいるはずは無いが、いつもにぎやかな時間と、どうしても比べてしまつ。そんなことを思つてみると、突然、背後に気配を感じた。

しかし、シリアはあわてる様子もなく、ゆっくりと背後を振り返つた。

「きたな　ジル」

心中でそうつぶやき、鋭い目でジルを睨みつける。驚いたことに、恐怖感はまったくなく、シリアの心は落ち着いていた。今から命がけの戦いが始まるといふのに。

その心の落ち着きは、先ほどベットで聞こえたあの声が起因していることは明白であつた。

「いまからあなたを龍仙地ドラゴル・クラウドへと連れて行きます。もひ、想い残したことないですね」

「だれが行くつて言つたんだ？　勝手にオレの選択肢を決めないでほしいな」

一瞬ジルは目を見開く。だが、すぐにつつもどおりの顔つきにもどつた。

「断るということですか？　残念ながらあなたに選択肢は無い。おとなしく龍仙地ドラゴル・クラウドへ……」

「そのなんとかつていう所に行くつていうのも、オレに選択肢がないっていうのも、全部あんたが決めたことだ。オレの意見を、あんたはまだ聞いてない」

「ほう、なんだというのです。あなたの意見というのは」

シリアはニヤリと笑うと、右腕を突き出して、言った。

「戦つてやるよ。これからあんたとのような奴が何度もオレを向かえにきても、戦つて、倒してやるぞ。あんたらが諦める限りな」

一瞬の沈黙が流れた。ジルは呆気にとられた表情でシリアを見たが、すぐにいつもの表情にもどった。

「そうですか……それがあなたの答えというわけですね」

つぶやくよつとそう言つと、ジルはシリアに向けて右手を突き出した。

「ならば力ずくで、あなたを龍仙地ドラグル・クラウドへとつれていきましょう」

その言葉が終るか終らないうちに、突き出された右手から光の様なものが集束され始めた。それは光というより、雷に近かつた。

「神の鳴動流ボルザルク」

その声と同時に、集束されていた光 雷が、掌から一直線に発射された。

静かな夜に、雷の波が映し出された。

終わつた戦いがあるな。だが、やがて終りが近づく（眞面目）

完結です。

終わりなき戦いがあるなりま それすらも終わらせてしまおつ

辺りはジルが放った雷が地面をえぐられ、砂煙が舞いあがっていた。四方八方砂だらけで、辺りがまったく見えない状況でもジルは冷静に正面を見つめていた。

ジルにはその自信があつた。  
しかし、辺りを覆つてた砂煙がはれた瞬間、ジルは思わず声をあげた。

あの攻撃を避けられるはずがない。

目の前にはシリアが無傷で立つて行った。突き出された掌には、先ほどジルが放つた雷が握るような形で存在していた。

バチバチと掌に握られている雷が音を鳴らしてた。

無言でシリアはその雷を握りしぶす。ジルは少なからず驚いた様子で、目を見開いていた。

「貴様……今の攻撃をどうやって……

そう声を放つた瞬間、目の前にいたはずのシリアの姿が一瞬にして消えた。

「ちつ！」

瞬時にジルは後方に体を回転させた。そこにはシリアが空を舞い、拳を握り振りかぶっている。

ジルは右腕に雷を宿し、シリアの右腕がぶつかりあつた。

その瞬間に見えないエネルギーのような風が辺りを包み、砂が舞い上がった。

「口調が変わつたな。驚いてるつていう目だぜ、それ

「くつ……！」

拳と拳が離れ、再び辺りは静かになった。

「なるほど……あなた、力がもどつたのですね？」

「ああ、オレがどうすればいいのかも、力が……霸龍が教えてくれ

たよ

「……少少悔つてましたね。次は油断しません……神の鳴動流！」ボルザルク

同時に掌から雷の波動が一直線に発射された。一瞬のまばゆい光の後、その片隅によけきったシリアの姿が見えた。これとばかりにシリアに向けて発射する。

それも敏感に感じ取ったシリアは、間一髪大きくジャンプして避けた。

「にがしません！」

またもやジルの掌から雷が発射された。空中では避けられるはずがない。

だがシリアは、迫つてくる雷をよけるといつそぶりは見せていい。それどころか、逆に打ち勝とうとしているように見えた。雷がシリアを包みこんだ。

勝つた！

ジルは本気でそう思った。その時、

「おおおっー！」

シリアの声と共に、雷が弾ける。ジルは目を疑つた。その時のシリアの姿は

「霸龍……シリア……！」

まぎれもない、ドリゴンの姿に見えた。両手両足全に鱗のよつなものがついており、爪は薙刀になつてゐる。背中からは翼が生え、今も羽ばたいている。

驚いているジルだが、一番驚いてるのはシリア自身だった。内から闘争心がみなぎり、力があふれ出す。これが霸龍の、ドリゴンの力だった。

シリアは体を小さく縮め、一気に飛び出した。右手を振りかぶり、ジルに向かつて突き出す。

ジルはそれを間一髪で交わした。しかし、すぐさま右腕から血が噴き出した。かすつていたのだ。

「くっ！」

ジルは一瞬その傷に目を向けたが、すぐにシリアに雷を放った。着地したばかりのシリアは、体をひねって勢いをつけると、雷にむかつて右腕を思い切り振った。

「おらあああ！」

「気合いをいれて叫び、その雷をジルに向かって跳ね返した。

「くそつ……」

ジルは小さくそつづぶやき、向かってくる雷を両手で押さえた。しかし、勢いかかった雷を押さえこむことはできず、次第に後退していった。

シリアは両手の付け根同士をくっつけ、ジルに向けた。

「もう一度言つてやるよジル。お前らが何度もオレを迎えにきても、戦つて倒してやるさ。あんたらが諦める限りな」

その言葉は、決着を意味していた。

「竜骨砲！！」

シリアの声とともに、掌からから竜のかたちを象つた波動のようなものが放たれた。

ジルが押さえこんでる雷」と巻き込み、それは爆発した。砂煙が辺りを覆う。

そんな中、ジルが姿を現した。満身創痍とはこのことで、右腕から緑の粒子のようなものに変わっていき、空へと吸い込まれる。

「どうやらここまでのようにですね。これ以上任務を続行できません」ジルは消えて行く右腕からシリアに向きなおし、冷静な口調でいつた。

「私が消滅しても、安心しない方が身のためです。私の消滅を知った同胞が、貴方を連れ戻しに来ます。そう、あなたが人間でいらっしゃる時間も、すぐそこまで迫っています」

そう言葉を残し、ジルは消滅した。

シリアはすがすがしい笑みを浮かべると、空にむかって右腕を突き出す。

「戦つてやるつて言つただろ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3867v/>

---

DORAGONOID《ドラゴノイド》

2011年9月23日03時29分発行